

43

入院中の躁うつ病患者の実態調査

精神神経科

加瀬裕之	坂上紀幸	宮尾益人
錦織靖	富沢治	丸田敏雅
鈴木恵美	千坂佳代	今勝志
木村章	清水宗夫	三浦四郎衛

今回我々は、1990年11月1日現在の東京医科大学病院精神神経科入院患者33名について診断区分、性差と年齢、そして特に躁うつ病患者について入院日数、病型、治療内容、そして更に本科関連病院精神病院との比較について実態調査と検討を行いました。その結果、統計的に有意な差があったものはまず診断区分として躁うつ病圏患者が45%と最多であり、ついで精神分裂病患者が33%でした。これは同時期に行った本科関連精神病院調査の最多疾患が精神分裂病で72%であったものとは大きく異なるものでした。また、本科入院患者の平均年齢は躁うつ病圏患者で58,7±16,4才、精神分裂病患者で32,5±15,9才となり躁うつ病圏患者の方が高齢という結果となりました。

また、特に躁うつ病圏の患者のみについてみてみますと本科では単極型が73%、双極型が27%と単極型が多かったのに対して、本科関連病院では逆に双極型が68%、単極型が32%で双極型が多く、統計的に有意な差がみられました。

入院期間についてみますと6ヶ月以上の躁うつ病患者は15名中3人見られましたが、いずれも初老期または老年期精神障害によるものでした。

そして、躁うつ病圏患者の治療薬は四環系抗うつ薬が最も多く、炭酸リチウム、カルバマゼピン、バルプロ酸はいずれも双極型のみ用いられていました。

以上今回我々が行った調査は極めて概括的に実態を調べたに留まっており、ここで得られた結果の持つ意味に現時点で解釈を加えることは非常に困難です。今後は個々のケースについて追跡調査を含めた研究をしてゆきたいと思いません。

44

神経-グリア細胞間相互作用に関する薬理学的研究(Ⅱ); アミノ酸の脳内動態

(薬理学) ○渡辺泰雄 林 秀憲  
張 向前 吉村康夫  
洪谷 健  
(法医学) 遠藤任彦

[目的] 中枢神経組織におけるアミノ酸 (AA) の生理的役割についての研究が進むにつれ、これらAAの伝達物質としての脳内動態を出来得る限り正確に把握する必然性がある。従来報告では、神経細胞におけるAAの脳内動態を重視していたが、最近の研究からも、グリア細胞でのAAの再攝取機構も脳内動態に重要な関与を有すことは予測される。本研究は、Gluの特異的神経細胞への取り込み阻害剤であるdihydrokinate(DK)を薬理学的マーカーとして用い、初期培養小脳顆粒細胞での神経-グリア細胞の存在比を変動させ、神経-グリア細胞間におけるAAの脳内動態を比較検索した。[方法] 生後8日令のWistar系ラットの幼仔から初期培養小脳顆粒細胞を作製し、培養日数 3, 7, 10, 14日目にHPLC-ECD法にて上清中のGlu, Gln, Gly, Tau の測定を行った。なお、cytosine-arabioside (Ara C) の添加、無添加により、神経細胞とグリア細胞の存在比を調整し、培養細胞の神経細胞数とグリア細胞数をCyto ACE 150にて定量した (Neurosciences, 1991)。[結果] 1) 培養 7日目以降、Ara C 無添加群は、Ara C 添加群よりも総細胞数の明らかな増量が認められた。しかしながら、神経細胞数は両群共、ほぼ同量であった。2) 50mM KClによる各種 AAの遊離量は、Ara C 無添加群の方が多量であった。しかも、Glu, Gln, Tau での最大遊離量は培養日数 7 および 10日目に観察された。3) DK処置により、各培養日数における Gly および Tauの絶対放出量の低下が観察された。一方、GluはAra C 処置群で明らかな増量が認められた。[考察] 以上の成績を総括すると、1) AAの遊出は神経細胞のみならずグリア細胞においても認められた。2) 培養日数による総細胞数の増量とAAの遊離量との間に相関性が見られなかったことから、本培養細胞において老化現象が生じていると思われる。3) AA殊にGluの取り込みはグリア細胞/神経細胞の存在比により、大きく影響され得る。4) DK処置によりGluを除く他の AAの取り込み機構は促進化されることが示唆された。